

＝要旨＝

「土壌保全活動における土壌の文化的意義づけの射程—風土論からの検討—」  
The Range of Cultural Importance of the Soil in Soil Conservation Activity

太田和彦

共生社会システム研究 9(1), 191-207, 2015

本論文は、これまでの土壌保全政策において十分に位置づけられることがなかった、生活資源に還元できない土壌の文化的・社会的意義を、環境倫理の立場から基礎づけることを目的としている。具体的には、日本と北米の、土壌保全活動および土壌政策という実践と、その思想的背景の比較を行った。また、農耕地土壌だけではなく、都市土壌にも着目する意義を、生態系サービスおよび風土論の視角から明らかにした。

第1節では、土壌の文化的意義（文化サービス）について、地域単位的生活環境の維持・更新および合意形成のプラットフォームの提供という側面から論じた。日本の環境倫理の理論、とりわけ風土論を通じて、土壌の文化的意義を基礎づけるとすれば、この側面がもっとも有効である。

第2節では、日本および北米の土壌政策とその思想的背景を比較した。日本の土壌保全政策が国土デザインに大きく参与することができなかったこと、そして北米の土壌保全政策は、農業者の意識改革を通し、連邦単位の国土デザインに影響を与えた一方で、都市生活者にとって土壌が依然として疎遠な対象であることを論じた。この背景には、環境倫理学が土壌をその考察の対象としきれなかったことがあげられる。すなわち、「保護／保全」の二項対立において、土壌は農業における「保全」対象に属するが、北米の環境倫理学は「保護」の立場に親和的なものとして展開されたので、土壌保全が広く議論の俎上にあがるとことはほとんどなかった。

第3節では、生態系サービスをもたらすものとして土壌を捉えたとき、農耕地土壌とは対照的に、供給サービス以外の生態系サービスをもたらすことが期待されている都市土壌について着目する必要があることを主張した。そして、土壌保全における土壌の扱われ方の問題は、供給サービスと、調整サービスおよび文化的サービスとのあいだにある断絶に帰せられると整理した。この断絶の解消の具体的な方策例として、地産地消——その土地で生産された食品をその土地の調理法で料理する——をあげた。これは、都市において人間以外が、農耕地において栽培作物以外が土壌の基盤サービスの対象となるということでもある。いずれにせよ、計画的かつ広域的な土壌保全においては、分離して評価されている土壌の機能を総合的に、理論的に整理する必要があることが本論文の結論である。

## ＝参考文献＝

- ベルク.A 1988 (篠田勝英訳) 『風土の日本—自然と文化の通態』東京, 筑摩書房
- デイリー.G 2010 (藤岡伸子訳) 『生態系サービスという挑戦—市場を使って自然を守る』名古屋, 名古屋大学出版会
- 畠山武道 1992. 『アメリカの環境保護法』北海道, 北海道大学図書刊行会
- 飯島伸子 (編) 1977. 『公害・労災・職業病年表』東京, 公害対策技術同友会
- Illich.I, Groeneveld.S, Hoinacki.L 1991. *Declaration on Soil*, Kassel, Kassel university press
- 加藤尚武 1991. 『環境倫理学のすすめ』東京, 丸善
- 加藤尚武 2011. 「植民地主義の文体」 『環境思想・教育研究』第5号, 東京, 環境思想・教育研究会, pp,91-94
- 上岡克己 2002. 『アメリカの国立公園 自然保護運動と公園政策』東京, 築地書館
- 亀山純生 2005. 『環境倫理と風土—日本の自然観の現代化の視座』東京, 大月書店
- 亀山純生 2007. 「“人間と自然の共生”理念の意味・意義と風土」 矢口芳生, 尾関周二編 『共生社会システム学序説—持続可能な社会へのビジョン』東京, 青木書店, pp.46-64
- 亀山純生 2009. 「地域再生のコンセプトとしての風土の意義」 『唯物論研究年誌』第14号, 東京, 唯物論研究年誌, pp,148-175
- 亀山純生 2010. 「風土保全の現代的意義—倫理学の視点から—」 小見山章監修・岐阜大学風土保全教育プログラム編 『森の国の風土論』岐阜, 地域自然科学研究所, pp,18-43
- 鬼頭秀一 1996. 『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』東京, 筑摩書房
- 桑子敏雄 1999. 『環境の哲学—日本の思想を現代に活かす』東京, 講談社
- レオポルド.A 1997 (新島義昭訳) 「野生のうたが聞こえる』東京, 講談社
- 丸山徳次・宮浦富保 (編) 2007. 『里山学のすすめ』京都, 昭和堂
- 宮内泰介 (編) 2013. 『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』神奈川, 新泉社
- Norton,J.B. 1991. *Towards Unity among Environmentalists*, Oxford, Oxford University Press
- Norton,J.B. 2005. *Sustainability. A Philosophy of Adaptive Ecosystem Management*, Chicago, University of Chicago Press
- 岡島成行 1990. 『アメリカの環境保護運動』東京, 岩波書店
- 太田和彦 2013. 「日本型環境倫理における風土論の可能性」東京, 東京農工大学大学院連合農学研究科博士論文
- レルフ.E 1990 (高野岳彦・石山美也子・阿部隆訳) 『場所の現象学—没場所性を越えて』東京, 筑摩書房
- 菅豊 2005. 『川は誰のものか 人と環境の民俗学』東京, 吉川弘文館
- シューマツハ.E.F. 1986 (小島慶三・酒井懋訳) 『スモール・イズ・ビューティフル』東京, 講談社
- シュラーズ・M 2007 (長尾伸一・長岡延孝監訳) 『地球環境問題の比較政治学 日本・ドイツ・アメリカ』東京, 岩波書店,
- 多辺田政弘 1999. 「地域社会に経済を埋め戻すということ—「琉球エンポリウム仮説」から地域通貨論へ」 『環境社会学研究』第5巻, 東京, 環境社会学会, pp.51-70
- 富田涼都 2014. 『自然再生の環境倫理—復元から再生へ』京都, 昭和堂
- 寺田良一 2001. 「地球環境意識と環境運動 地域環境主義と地球環境主義」 飯島伸子編 『講座環境社会学 5』東京, 有斐閣, pp,233-258
- Thompson.P.B. 1994 *The Spirit of the Soil: Agriculture and Environmental Ethics*, London, Routledge
- Thompson.P.B. 2010 *The Agrarian Vision: Sustainability and Environmental Ethics*, Lexington, University Press of Kentucky
- トゥアン.Y 1988 (山本浩訳) 『空間の経験—身体から都市へ』東京, 筑摩書房
- 和辻哲郎 1979. 『風土—人間学的考察』東京, 岩波書店
- 吉永明弘 2014. 『都市の環境倫理—持続可能性, 都市における自然, アメニティ』東京, 勁草書房

= SUMMARY =

Many countries institutionalize natural resource conservation such as air, water, and soil as public goods. As for the soil, Global Soil Partnership (GSP) has designated the 2015 as the “International Year of Soils”. At the same time, GSP plans to revise the "World Soil Charter". GSP will take this opportunity to request a revision of legal systems regarding soil conservation in each countries and regions. In a revised draft, GSP emphasizes that soil management decisions are typically made locally and occur within widely differing socio-economic contexts, and a strong commitment to gaining an understanding of local knowledge is critical.

We believe that new soil conservation guideline should be welcome by farm owners, local NPO and NGO. Therefore, government should promote creating monitoring systems at the national level through investigating and inventorying local ecosystems and cultures etc. However, a value standard necessary to use those big data effectively is not clear. In many cases, value of soil is perceived as combined value of generated plant-and-animal product. Is that all?

To fashion a metaphysical view of the soil-human relationship which has often been ignored, here we studied the Fūdo theory of Tetsuro Watsuji and Sumio Kameyama. Here we found that new soil management concepts are lacking a viewpoint that local culture is a method to adjust a function of the soil which human beings cannot sufficiently use. These observations indicate that soil information is not only specifications of the production factory, but also foundation of the local identity. These results provide new insight into creating a draft of a “Basic Law for Soil Conservation” (provisional title) in Japan.